

長野県伊那地方で報告されているヤマジノギク (アレノノギク) について

今井建樹

Kenju Imai: On *Heteropappus hispidus* at Ina District of Nagano Prefecture

1 はじめに

伊那地方では各地からヤマジノギクが報告されている。杉本順一氏の長野県植物総目録では、アレノノギク *Heteropappus hispidus* として、南部の山麓原野丘陵の日当たり草地に多い。木曾（南木曾町吾妻以南の各地）、上伊那（飯島、七久保、片桐、南向）、下伊那（生田、河野、片桐、神稲、下条、根羽、平岡）に。また同所にクダザキアレノノギク *f. tubulosus* Hara が混生し、周辺小花の筒状、唇形、中間の種類のものが多く混生するとなっている。

ところが小渋川の河川敷にこれが群生していることを奥原弘人氏の案内で知った。この種は乾草原に生えるとされているのに河原に生えているのはおかしいし、冠毛の様子等からどうもカワラノギクもあるのではないかと思われた。また頭状花の変異の多いこともこの地方のものは異常であった。この疑問を解決するために調査したので報告する。

和名について調べた結果、ヤマジノギクとし別名アレノノギクとするのが良いと思う。ところが牧野新日本植物図鑑によるとヤマジノギクはカワラノギクの別名となっている。そしてヤマジノギクに当たるものはアレノノギクの名しかない。牧野図鑑のものは不適切と思うので、前者を用いることとする。なおここにクダザキアレノノギクとあるが、ツツザキヤマジノギクの和名で長門（山口県）から報告されているのでこれを使うこととする。

2 調査と対象標本

(1) ヤマジノギクとカワラノギク

ヤマジノギクは日当たりの良い乾草原に生

える越年草。分布は東海地方以西（伊豆爪木崎が東限）・四国・九州となっている。

カワラノギクは河原に群生する多年草（多くの本はこれにはふれていないが、栽培して見た限りでは越年生。多年草は誤りか）。分布は関東南西部と静岡県東部となっている。

上記から見て小渋川のものはカワラノギクではないかと予想され、分布域からも可能性があったと考えた。

外見ではこの両者は大変よく似ていて区別は困難である。強いて言えば葉の幅がカワラノギクがやや狭いこと位である。この両者は属が異なりヤマジノギクはハマベノギク属 *Heteropappus* Less. カワラノギクはシオン属 *Aster* L. である。この属の違いは冠毛の長さでははっきりと区別出来る。

図鑑等によると、ヤマジノギクは舌状花の冠毛は白色で0.5mm、筒状花の冠毛は帯赤褐色で3.5～4mmとある。これに対してカワラノギクは舌状花・筒状花共に帯赤色で長さ4～



図1. 頭状花の変異(小渋川産)。同一の株に咲く頭状花

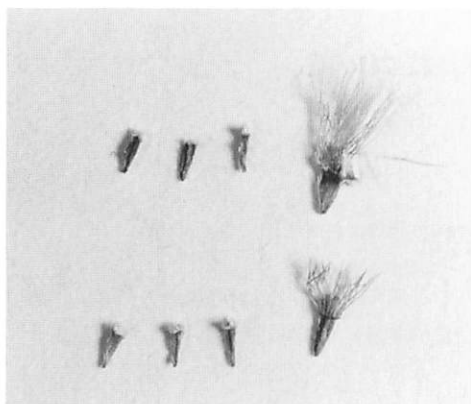


図2. ヤシナギクの冠毛(鳥根県産)



図3. カラナギク(東京都府中市産)冠毛

上下別株。左3個同一頭花の舌状花、右1個筒状花。(以下全図同じ)



図4. 豊丘村産冠毛 カラナギクと思われるもの

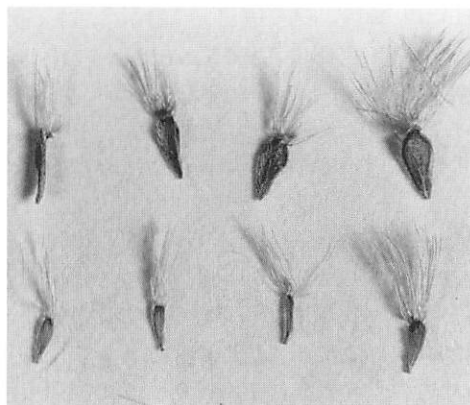


図5. 橋木村産冠毛 カラナギクと思われるもの



図6. 高森町産冠毛 カラナギクと思われるもの

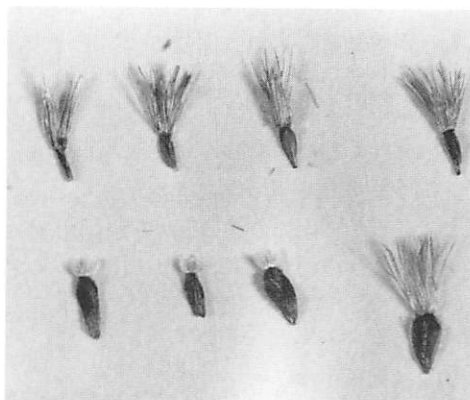


図7. 小渋川産冠毛 上カラナギク・下ヤシナギクと思われるもの

5mm、毛は多数あって不同長で鋭尖頭となっている。このことから冠毛を重点に調べることにした。

(2) 調査標本

(a) ヤマジノギク 金沢大学から借用した15点の標本。三重・滋賀・兵庫・山口・福岡・大分・熊本・鹿児島等の各県産。1928年～1982年の9月～12月採取のもの。

(b) カワラノギク 東京都秋川市府中多摩川河原1991年11月2日採取標本2点。

(c) 下伊那郡豊丘村神稲佐原1991年10月28日採取標本3点。生育地は畑の土手の草地。

(d) 下伊那郡喬木村大島1991年10月28日採取標本3点。畑の土手の草地に生育していたもの。

(e) 下伊那郡高森町原野産1931年10月20日採取標本2点。荒れ地の草原に生育していたもの。奥原弘人採信州大学所蔵

(f) 下伊那郡小渋川河原1991年10月28日採取標本10点。河川敷の増水時には水を被るような場所とその近くの土手の草地。

(g) 上伊那郡駒ヶ根市中沢陣馬形山1936年8月16日採取標本4点。山地の草原に生育していたものと考えられる。寺島虎男採信州大学所蔵。

(a)(b)は種名のはつきりした比較対象のためのものであり、(c)以下は長野県内に分布する現時点において入手出来たものだけである。これ以外の地域のものについても今後さらに調査して見る必要がある。

3 結果

(1) 舌状花冠について

長野県内に見られるものは舌状花冠の変化しているものが大変多い。完全に筒形をしているもの、下部だけが筒形のもの、2～4列しているもの、これらの入り交じったもの等がある。一つの頭花について見ても、総てこれらのいずれかになっている頭花、これらが混じりあっている頭花等がある。また同一の株で見てもこれらの いずれかの頭花だけのもの、こ

れらが入り交じった頭花を付けるもの(図1)等がある。また舌状花冠の長さも16～22mm、幅2.8～3.5mmと変異がある。

多摩川のカワラノギクには筒咲き状の変異は見られなかったが、他県のヤマジノギクには僅かながら筒咲き状のものが見られた(標本のため不確実)。

舌状花冠の色も県内のものは紫色から淡紫色、白色と変異がある。

(2) 冠毛調査

上記の標本について、舌状花と筒状花の冠毛を測定した結果は次ぎのようである。以下舌状花は舌、筒状花は筒として略記する。

(a)の標本 舌 0.2mm～0.8mmの範囲で総て白色で、平均0.49mmであった。

筒 2mm～4.5mmの範囲で平均3.3mmで、帯赤褐色(図2)。

(b)の標本 舌 3mm 筒 4mmでいずれも帯赤色で同質の冠毛である(図3)。

(c)の標本 舌 2.2～3.7mm 筒 3～4mmでいずれも帯赤色で、両者とも同質の冠毛であった(図4)。筒咲きも、普通咲きも特に違いはなかった様に思われる。ただ長さに少々変異が見られたが、カワラノギクと断定しても良さそうである。さらに多くの個体について調べたい。

(d)の標本 舌 2.8～3.5mm 筒 3.7～4.2mmでいずれも帯赤色で、両者とも同質の冠毛であった(図5)。但し舌状花の冠毛の数が少ないように思われた。やや疑問も残るがカワラノギクと断定出来そうである。

(e)の標本 舌 3～3.5mm 筒 4～4.5mmでいずれも帯赤色で同質の冠毛であった(図6)。カワラノギクと断定してよからう。

(f)の標本 筒 3.2～4mmで総て同じ長さであった。舌 0.5mmで白色のヤマジノギクと考えられるものと、3.2mmの褐色の冠毛のあるカワラノギクと思われるものがある(図7)。ねもとに0.5mm前後の白色の冠毛があり、そこに筒状花と同じ様な長い褐色の冠毛が1本から多いものは20本位まで生えていて一定してい

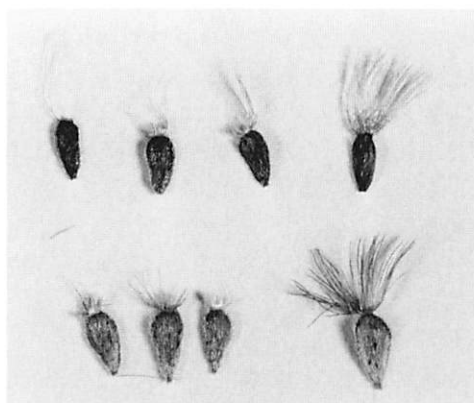


図8. 小渋川産冠毛 上下とも雑種と思われる

ない(図8)。これは同一株は勿論のこと同一頭花内であってもその数は一定でなく、長さも長短不定である。また筒咲き・普通咲きに関係なくこれらの変異は現れる。これらのことから見て図8の様なものはヤマジノギクとカワラノギクの雑種と考えられる。そこでこれを和名「イナノギク」x *Aster inanensis* K. Imaiとして報告したい。

x *Aster inanensis* K. Imai, hybrid. nov

Achenia flores liguli variabilia, cum pappis albis circa 0.4 mm longis et pappis badiis circa 3.2-4 mm longa. *Planta* inter *Aster kantoensis* et *Heteroppapus hispidus* (= *Aster hispidus*) quasi intermedia et verisimiliter ex hybridatione harum specierum orta. Differt ab *A. kantoensis* achenia flores liguli cum pappis albis circa 0.4 mm longis, ab *H. hispidus* achenia flores liguli cum pappis badiis circa 3.2-4 mm longa.

Type: Nagano Pref., Shimo-ina-gun, Nakagawamura, Koshibugawa 500 m (Kenju Imai, 1989. 10. 21, SHIN 181297, holotype).

Jap. Name: Ina-nogiku (nov.)

(g)の標本 ここにはヤマジノギクが1点と上記の雑種と思われるもの3点とが見られた。さらに多くのものを調べればカワラノギクも混生しているだろうと推定できる。

4 結論

上伊那・下伊那地方からヤマジノギクとして報告されていたものはヤマジノギクとカワラノギク、それにこの雑種の3種がある可能性が極めて高い。伊那地方のものはヤマジノギクが必ずしも乾草原に、カワラノギクが必ずしも河原に分布するとは限らない。

ヤマジノギクについては北限を、カワラノギクとイナノギクは新分布となる。今後の調査によって、分布状況をさらに詳しく調べる必要がある。

現時点での調査から見て雑種性のものが極めて高いように思われる。伊那地方に筒咲き状のものが非常に多く見られるのもこれに起因しているのではないかと推測出来る。木曾からの報告もあるが現存しているかどうか、標本も入手する事が出来ず調査できなかった。

5 あとがき

関東地方から静岡にかけて分布するとされるカワラノギクについては河川の改修・護岸等によって絶滅が危惧される種としてレッドデータブックで扱われている。長野県内での報告は今までなされいいなかったが本種の調査と共に保護対策を図る必要がある。

豊丘村ではツツザキヤマジノギクを天然記念物に指定して、村内3カ所でその保護に当たっている。その成果を期待したい。

筆者が小渋川の本種の種子を庭に播種したところ極めてよく生育し、その種子が飛んで自然に発芽して、通路等で良く育って年々花を付けている。これらは極めて変異に富んだ雑種性のものが多く見られる。

本報告を出すに当たって井上健博士には執筆についてご懇篤なるご助言とご配慮を頂き、情報・標本の提供等多くの方々大変お世話になった。ここに関係諸氏に深甚なる謝意を表する。